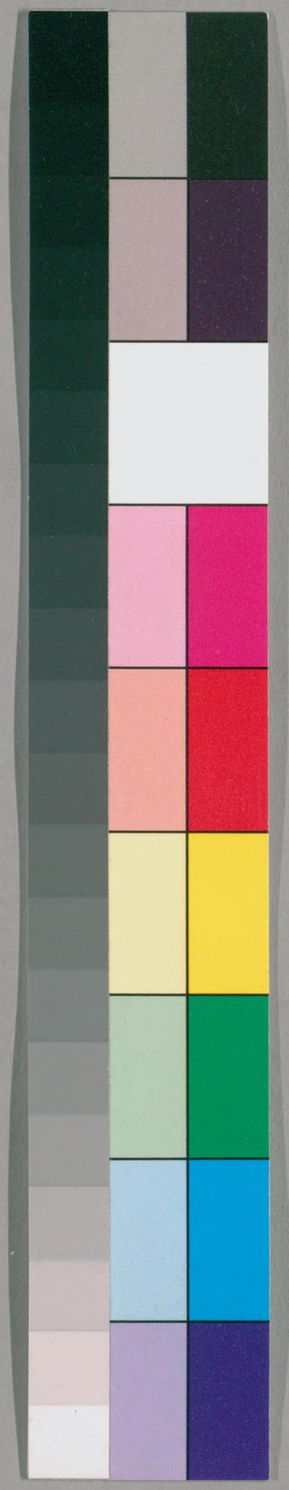
863
105



国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105

ガラス使用

863-105

和露文庫

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

ガラス使用

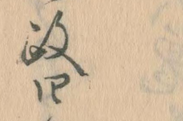
国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

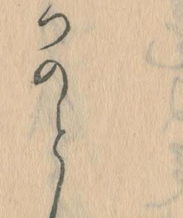
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

ガラス使用

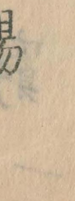
乃源清をも忘れましやと一冊子に
なせしもそかの九牛に一毛にも忘さる事乃
微言なるべきにしらふ事しい哉
菓溪庵乃東窓のまへに　却老
清しんさ筆をとる
竟改口のとし





歳旦　口號　賦參　宮意　　七十七齢　正因翁

新年樂在勢南春
遥越河關尋故人
須得與吾東帝賜
謹寅再拜兩宮神



国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

歳旦

春来欲拝太神宮
四十里程道亦窮
誰咲老翁企蛙歩
馬蹄疾一任東風

七十八齢
正因翁

辞世

遊戯歓楽統在眼前
坐花歩月七十八年

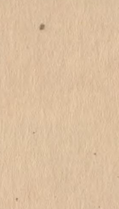
正因翁

全

幻人幻出住幻境

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

幻人幻滅去幻境
幻人端的放一箭
直入實相無相境

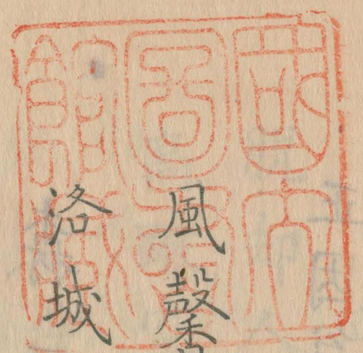


直入正因居士十三廻追善

菊溪菴都崔輯

到来次第

釋妙足



風聲恨昔欠交情溢譽今猶滿
洛城靜慮有餘思雅韻杜鵑叫
月十三聲
風流一世月花情更

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

愛逃禪游戲行邑
耐未梢言在耳陰
森戛木杜鵑鳴
禪詩一絶追薦

正因翁十三回諱

桑門白賁

追悼

正因翁十三回忌　桑海

脫却人間睡夢鄉忌辰忽轉十三霜
高蹤空掛東山月毫彩映來一點光
今茲値
直翁正因居士十三回之忌景聊
賦野格一章以充香供云

曠鑑

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

寄跡人間謝利名詩歌唱和適平生
鴨河曳杖春風靜鹿海泛舟秋月清
庭上自知耆栢意社中誰結白蓮盟
如今試問舊來事十有三霜殘夢驚

正因翁有勢州人也嘗入洛陽
擅名風雅之道而終身于葛原
矣令茲寛政壬子仲夏正逢
翁之十有三周忌而看其遺稿
始知其爲人因賦一絶 追薦

蘆洲

遺冊令何落草蕪嗟翁昔月出塵區
青苔墓上令人感風采相傳滿洛都

追悼

正因翁十三周忌 河東

風流一代有誰遶陳迹招魂去不歸
辞世曽題子規句名聲高向上林飛

同二首

一自尧翁奪百年菊溪流水絶朱絃　吳水

何堪十有三春恨落月東山哭杜鵑

其二

憶昔葛原詞客遊孤墳宿草滿荒丘

仙魂如問無生事寂々菊溪明月流　常居

同

陳迹風流月一環照看仙尧舊時顏

十三光景猶如在影滿閒庭松栢閒

奉追薦

高城正因翁十三年法忌

東山花鳥好因緣身

後風流詩百篇感舊

祠前薦蘋藻居諸如

夢十三年

香山彰拜

菊溪菴主人今歲壬子之夏迎亡父
正因翁一十三年之遠忌而有修善
供養之設孝頂誠精之至不堪讃
歎聊賴於猪公而述隨喜之微志云

十有三年已往前

猷離穢土永遊仙

空留菊水孤輪月

影照帝城千里天

八十有四翁
收六菴

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

正因居士十三回忌

泥裏芙蓉出水清正
看安養宝池情別時
遙憶十三歳世上空
留萬古名

右題

寄蓮懐旧

釋慧岳

壬子五月菊溪菴主修其
先考正因師十三回法忌諸
君各有吟詠因賦贈之

夏木陰〻白日幽東山朱景自
悠〻詞仙元識吟風月空使人
閒感昔遊

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

杜鵑聲落蜀山傍啼血爲誰愁
恨長此夜相憐懷舊坐却花
月入詞章

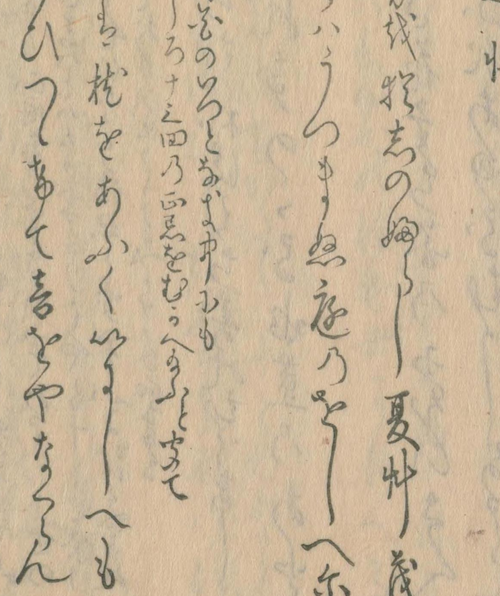
深尾輕羽拜

直入正因居士十三回忌追善

和歌

到来次第

追悼



僧正尊明

あし方我 我志の姫らし 夏艸茂
あやらハうつまり 恩庭乃をしへ尓

月花のいつとなかよ中にも
此しろ十三回乃正忌をむかへまふと云て

夏のあまた枕をあふくゆましへも
ねりひつてあて吉をやなくらん

高蹊

大人乃うけたりにかまし老蓮てふ
文字ハ正因菴乃すさひ少てあまし世の
かこ美とハなまそりもやも十とせ余り
こゝせになり侍ぬと空へなふにかの文字ハ
おとおりひ出ゝよみ字ノ印なる

なれ人のむ称法ちち寿れ記ゝまし毋
志られ字のゝ字水莖乃あゝ

釋 尚隆

斬ちつさ花をちぶ乃おもひさへ
志のふにあ母ゐむしなるん

詮

河れをさ川さく然れ浩ひても
ゝ屋らぬむしさそこふめ

光和

あまし世乃苦を今も志ふらし
ちぶ面新我おりひもそハ

篤志

菓溪菴先人乃十三回に当ると空て

釋 妙足

まちちれのふまし世なら姉く風に
然ひ志ふれ浩ぬ毋にほへる

日 松阜

ほとゝお次苦かゝらへ十とせあまり
姉ゝも浩ひしれ又りし母乃ほ

文則

もれにおりひ月に思ひて十と寿ゐまり
三世の佛をさきまれむらん

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

夏乃情田のうろを
けみ毎猶ほ志ほりうゑん十とせあまり
こゝ也野のそゝ我志のぬきりしを
おもしもおもさほよ此夏の露ことを
思ひむすや神志むすふ事
郭公たまに世かゝりと月日のこゝ
ちやうつり来ぬさみ毎猶此夏
よ我ちかうこゝ記とそ思ふ十あまり
こゝとせるまし詠我こゝふしも

尼 物外
尼 観月
尼 知了
化来

庵やまとの筆乃あとを傳ひ傳ひし
栗溪菴うしの主こゝち男五月十九日
たゝり十三年此忌なりけれは
こゝ泥く記の流れをくしく也ひよりし
むしの夏乃木かけをそ思ふ

尼 智光

西周義世にいとせし時
ちなら深ゝれハ
かふきなをふりまし人我思ひむて
おくも侍むし弟山むとゝお濱

仝

先大人乃清水刻の今に出来ハ
まちも船のむしし此う筆そ思ひ給ひ
新端に白ふ雲に志むまゝ

女 歳久

あたれ世乃家と清てもなそしこれ
うまし恵のむまれ清うへ事
有し世を志のふ手向乃神のうへに
清白き又月此至とみたまむ
なき人を思ふなくても蓮葉の
家とむまれんえすしおそ思ふ
百千うへ梨なる我もかたらへ郭云
なれ人志のふ者此木ゝ伊し

如雲

仝

翠岳

義肇

とゝせあまり三し世も同し蓮葉に
けさをく家やなみたなるゝ事

記成

うれなれせしも此程と思ふに
たやすと野金三と世に成ぬれハ
茶を描水をくめるもなき人乃
詩我ますまぬ手向とをし搭

輔世

高城正因翁等ゑかその兄にて先祖乃詠を續へき人
なりし世をのうるゝ此心あまりてたゞちをに敷我
清うせ手ゑ月ハ玉くを繰りすとゝ立むかひ手後
都のむかし鷲乃山崎藤に杖をとゝめて老を
嵜ひ七十余り八とせのまち杖をかさゝ○まゝへといと
すくよりなまくしゝ鶴亀も齢ひの限りまゝ多積ハ
いまし天明と改るのとし年月まつかゝ終よりの
なれ人の数に入まひぬ志ハあまと孝子郎雀ぬし
詩をつきて世に俳諧の道をおとこし手ゑ四男に
むろこりて親の光もうちせぬハいと有難に志なら

すやけるをおとし十里勢あまり三とせ乃
思に尚書ぬとて諸君子乃ことゝ法我河川めて
手向ゝ新しにせつゝまもむとゝかゝなるゝ事なれハ
何をうれ手向へきよしまゝ新し

勢州神路山藤鹿海神職
正因翁出生本家相續
荒木田雪廣

いせの海手ゑ乃演にもとめても
ゝゝめ此手ゑ何をも手向ん

先祖代々乃廟石ゑ人事先生郎雀ぬし乃
建られし石塔に向ひ

思ひ出す十三年や苔乃花

仝

十三回のうち語はし清源禅師乃御廻向に
随身して
碑乃銘を洗へハ去れつ又月雲
仝

正当廿日香花紙まりて
蓋へをくことをあまたに思ひおく
なほ袖ぬらはみすし毎乃はる
都雀

再へ行支を求めて居すから
前や念佛高系る極楽
七十八案
正周
末詩出

菓溪菴に父の十三廻と事供佛旋僧乃佛者をなる
その歳にまゐりて持佛堂を拝むに佛の像にし
たしてほく祈し人形立里しきを思ひけすいかなれ
ばたゞやすと覺るにあるしゝいふハ家父乃病ひ
かゝる事なき事なる時何れ西行上人其土人形の見
こゝ所といふに所事足を事になし事深草乃里に
所事求うへり花のもとに墨を見て世に空ゝ花し外に
見せり事思ひる所りて迷の事にすられ事也 月

婦人と手下にす糸屋りとかゝ所その孝なる
万こゝろのまかさきにし

・みりあめ人形も
神をぬらす画

蝶夢

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105
ガラス使用

爲久

東林寺に名をしるし菜溪菴乃あるし先考君
年四追福の一帖を編集をとゞるに詩歌連俳を
まゝに加へるゆゑなれば予もされおよそて贈りしと
歌乃中山の老師乃せちにすゝめるゆゑハいれと
う稱て淡くなるゆゑ草をこの所侍れ
西周義世我ちりぬひハ庚子の年となんきこふ是は

繁雅

琴の號此數しきゝ姉る忌日ほしく
むかしの稱ゆゑ記ものかへさ次

十七

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105
ガラス使用

題 菊溪庵愛蓮額辞 并發句

菊溪庵の梁よりけし 乾蓮の額ハなんいまし

天明ましめてのとし 皐月まつかゝ落ちたれ

香よけそけれてもつなくも苦しく人と成すひし

正因義いますもの時 都尭師を始予兼ゝ門人の庇中 我

花のもとゝ唯よせてやまふ乃庶ゝくるしまもなく

うへの衣をかさのあはゝかしらをりこけて何るをう

思しおのひ久んそれしハ墨をすまを何しハ紙を

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105

ガラス使用

額ハうけて久しく成ぬまとも忘れぬ心をもなをも
むかしうし立へりて
家なりてたちすまかし執渡り邪　都麥
さとりうなむ心のたちすゑ　全
竟乃詮

菊溪菴乃師宗とて其流れよりも心清くれ法を八
親に津かふる事　在世をいふも法とも知今に
至る迄　其日の回る毎に　其を掛水をも向和田津
海の源に沖にうるめをもとも足曳乃高麗山とし
このうを拾ひあ季と河邊のものを父此江魂のまへに備へ
朝夕の津とめ家を志うに誦經此ゝ忘志つゝに香の煙此
一筋に心の実を尋しまふなりいましへ子路の世に
いてゝ後藜をいらても親に仕へし昔我こひ又子貢

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105

ガラス使用

貴重書五世

高城氏あるし父正因居士の十三回忌に
当られるに元と望一周忌の追福にし無
やすれ学の集冊を営て續て三廻七回を
法ゝるなく弟ハ此ゝるかたとしハ此法廻を
ひかし山菱林寺なる閑所の精舎に
追善の席を儲け都鄙の旬々を
櫻木にしたまとめて四方に承ひ給へ

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

事都崔子の生志を悲し葉溪菴の
機なる我達派をも謝信をつくし
たゞ風姿冷清の差別滑稽の自在
まことに一紙一言此大道とハ是なるん
こゝ[illegible]
法[illegible]樗

富嶺

人生れなからしてこれを我知れる者に如くなし
師に請ひたるハ手惑終り不解と古賢乃金言
宜なる哉我友に吾ゝ師菊溪の[illegible]和清の
戈當ゝて臨池[illegible]奥秘を探り[illegible]
蕉風乃源源を窮[illegible]ひ養生我撰育
すゝ事古今に秀たりかゝるゝ[illegible]歳月
遠境四方[illegible]名士先生の德を慕ひ風我
らん事其門に請ひ遊へる人斗乃ぬくに
して算なるに遑[illegible]なるに志[illegible]

先考の十三回に当れば諸君子の手向をこゝろ
その追福に伝へんとの志を天も感恵ありけれ
机上にあんまり鉄玉声貞をとりしかば是全く
至孝農なす少ことの我 僕門蕪の宋に法ら
あれは ことに鉄鉢の何も案つて所に一句を
霊なへけしをする

璞彦謹書

詩に歌にあるを手向乃
夢源

法名直入正因居士十三回忌追善
諸君子 恵投 俳諧之發句
到来之次第
老ゝ眼に石菖のあかさへ分
といふ先人乃句を思ふて
石菖若 新もうかふや法の水 東山僧正 歌暁
正因菩薩僧若 十三回忌 懐旧
船を掉す僧の笑顔や蓮の花 正林老法師 無爲

追福

手向居る木魚に合す水鶏の那　沙門　篤主

ゆうしさは程時を知る便の那　八十有三翁　杜口

追善

手傳ふる描もまつうる夏花の那　雪下菴

正因翁遠忌のちろちへを

啼蟬やをくなる日のなつかしさ　有響

菓水も手向となれよ夏乃ゑの　重厚

先人辞世の句を思ふる

宮託むるてなかぬ夜我事知らぬ　八十有四翁　収六菴

追悼

却菓子手先人乃十三回の追福に

神むへおく夏出乃泣や星とし　嘯山

正因佛十三回の法延に中さる

孝の道や知うりかしやく菓山　賈友

思ひおせと蓮宮知うり凋らうり　黛山

名ハ今にし弥る光りや十三紀　柳坡

石菖を見るにつきても祀会哉　富嶺

十三紀嘆や手向乃涼見艸　貞也

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

水上をとふや貴久渓蓑菖蒲　鵜江

玉追鳥そ子としの折るへし　五口

郊を出しの
家大君の十三回に中とる

みしかあや既にむしの蓑語　来之

一むしの名ハ柄もせて龍蟻の那　百秀

実も名てるぶ茶の茶惜く
をもひしもたや十三年になれハ

青梅此香をやむしの十三里　九重

十三の枝を手向ゆ粉香花　仙之

四り分り十に三とせ乃風車　仙雅

函後乃月すゝし十三重の塔　爲角

菓渓菴乃先考
十二回の忌に呈意運

なこの紀根や記念乃筆のあやめ草　牛行

菓渓菴賛主
父君を忌の追善を請しまふに

実は手香そ志るハしきむし草　乾峰

手向るや史に夏中乃第次年　如洋

手向たや志るへ涼しおよ杉乃琴　寄石

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

春秋とその世も如りく夏乃月　寄節

云の葉乃今に傳ふやむかし夏　五仙

をもひおもすやたる橘の咲よつ事　志諺

むかしし清の茂りや橘檸　幾風

咲苔や俤乃清のむかしろ　吟石

琴の音や雑文洗し和清天　文斥

枝枝もたや十三そ志しし井　斗雪

手語を吊ふ余苔の匂ひう那　呂蛤

郡巻のぬし正因菴乃追善を徒とめ
と行りて何れ茂お匂を手向ふ事も
数なるぬ方のふつうなかく云乃葉紙
つゝねて灵前にまゐる

手向小もなれし苔の苔をたれ　士口

家祖乃追福をいとなるまふ
菓溪菴主人乃至孝感慨の余りに

なれ語も茂れ一樹や十三年　呉明

高城正因居士十三回忌に
千載堂看主

訪ふて知れ年々業々餘る花　丈士房

菓溪菴主人乃亡父直入居士の十三年此
祥忌に当らせのふと空に予ハ知る人
少なあらはしとも其風操城志たふまて
いさゝか鄙詞を述くまて
灵前へ呈するも無く形穢城秘るのみ

拙居し　此乃蔵りや十三年　只有

法の裏　あらはし　吹も薫りけれ　青銭

追悼

菓溪乃ゆるし父の遠忌に回り
追福のいとなら有るよしも皆来り
それハ予もいさゝか志をのぶる

夏の日や　卒　柴となる手向艸　蘭更

手ら時此黒法も　無や　会佛講　土卯

菓溪菴乃厳父十とせ　ゆまり
三とせのふ脾　前にぬるゆきて

却てゝお次ゝちも　旬へ　ゆ法乃菴　古塘

追善

正因翁十三回に一句を手向とて

極楽の　ちをもうけれ　蓮乃む　季陽

追福

法うゆるそたむけや　家の風すゝし　月峰

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

月にまくその夜なつかし　墨栗花　輕羽

手向ける水にしうかふや　雲乃峯　馬南

追善

安こそと今に手向たやおとこ　河州甲斐田　之山

家嘉に古むし塚や　菩乃ち那　播州天神邑　南路

手向人も皆うなゝるや　百合の花　江州日野　兎水

佛前へ先そなへたや　神荔子　〃　棹歌

玉越事六夢七声おとこ　幾す　〃　眠江

追悼

積事志報十三塔若新すくし　布丹

一枝八夏花乃和の手向ける那　尼　倭泉

ゆく春の月新すくし十三里　如角

十三年蓮にさくしよあるしられ　女　紫蘭

也り来る供養乃そのや　樹の実　百榮

神なりの毒にし気れを掬くこそり　雫滴

上品乃産に咲なおとこ　自去

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

芸物花も西へかたゝ畑く夕アり那　東皋
白蓮のうき葉をとりて手向ちや　桃李
佛ゟ婆婆ハ黒さのうちゝあれと　鶴延

通夜曉聞鸞　龍

又月毎やちゝろの侯ゟ手向ち　雪橋
手向ちや夜宮を掃も十三枚　東鹿
独の宮ハ実ありゝ久りなゝ又手ゟ　如牛
手向掃ちゝ芸挑樹乃芳葉ゟ那　野鳥

追悼

又月毎や十三橋乃法若道　奥千里
愛乃間といふ事手向る若子ゟ　輕風
時も又十三番艸や田のまゝら　玉枝
手海ゟ手向ん畑乃凡若子　正保堂
入月も十三うちゝ扇子ゟ那　可樂

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

三伏も琴柱乃数に津をりけり　洛西連　愛山

蚤につき数に津事思ふ義う那　始燮

きのふけふたゞや拙子も十三夜　彌遊

西新にまつくちなしや花車　沙門　紫山

手向たゞや水少も清ち夏乃菓　城南佐山　米山

一夜ハ手向に唱ふ如くお次　〃　如雪

手向ふにおくろ居せる牡丹うれ　〃　雲坡

菓溪菴主人慈父の一周忌の追善ハ音羽山清水寺へ大額奉納ありけり詩ハ忘れ草といふ一帖を編てた御遠川函へも贈らましハきぬふけふの中ふにをりひしうたゞや十とせ余りの供養しなふと云て

十二の志らへすくしや峯乃杢　天隣

正周居士十三回の忌に當らせなふせめてハ師乃佛廟へも執加華と短う歌も侍るにしに又鶏の唱ふれハ

東雲にし枝折時まハ風薫る　巴陵

法道に津らなりる

冥し画に歌も手向る新菓哉　仝

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

きちたれや袖ふりてとふ塚ぬし　玉指

栗のぶ　あへきよりや空に夜ふ　瑞斗

手伝に見ぬ手向や　苔清水　机莚

法莚に浴らなる乃日

なき人もかくそとをりふ蓮う那　沙門　松石

さらひ正周義の十三世の忌を吊しひのべり
ちうき読に凡乃浴るに凡と却雀宗匠乃
善を追ひすひしに孫孝梅紀名之なる
粉手向にもなら華うといつよりんかろく
一句に浮む我灵前へ来ふ
よりたれ孫にてぬらしぬ　思回乃芽美成　成雄

追善

手向艸いつまでも茶の色すし　漣月

菓溪乃みなそとゆうし夏の月　樗太

青梅や其毎日をりふ樹乃繁　烏舌

竹柱て此日にしたる蔵りう那　左文

木に枝にし法乃面浴る皐月うれ　右文

青梅にし無やそのまゝ白ひ　楓橋

縁に今手向ふ筆やとゝに茶　和笑

追福

香花を飲食なれや夏百日　都牛

都雀先生まめやうに御亡父の追福を勤めふを賞ひ侍りて

按子乃法うえ目出度忌日う那　松化房

手向るや結ふ清水も志る絶なる　仝

風薫る春そ降へよ夏佛事　昌祿房

啼やこさやふをりひとりなく夜　百葉

菓溪菴宗函乃爲父正因翁郭云の辞世を祈しめひしも法しう十三回乃忌となり追福をなしかふる

おとしまゝ次ゆうし山路も一世り　城之

追悼

菱鉢なかなまこふとも蓮う那　子衿

人傳又そく安のうそ知らぬ夜　延全

又月夜や石山も菓乃一むらし　何得

きうまはしその世かたり乃郭云　麥舟

又ありふ仇のかたみや去用干　一專

志らぬ人とふや都のまゝあらし　晩浦

手向たや夏なれ蓮の水清き　玉淵

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

香もなつかし俺へ出て行や岩櫁　李三

故人茶汁を好みなりしハ世先て

御りおもふ手傳ふ友や一欠酒　仝

新夏やまつり名あへぬ手向あ　白賁

正因翁氏世を去るのしハ十三周のむかし
なれハ今ハ極楽世界にいやしてや時乃
うつりかはるなりも有ましと現世の罪を
おもひおもしこそ

色給ふ佛や夏にうしゆまし　倚石

家父君乃遠忌を弔ふ事ふこゝろの
菓溪菴をとり一云をむかれる

有縁無縁遠山若木の和しく　浪花　白仙堂

追福

観されハ手名かんたし水芙蓉　化翁

手風の薫ひ行きて西乃秀　柊角

ぬれてやふに見へぬ蓮の浮葉の那　古竹

樹しく乃葉や十三年若詠哉　路川

蛍火や水の井花を手向竹　舩橋

なれ人者むかし思ふや又月晴　波音

琴弾ゆ一夏手向んおとしうな　湖人

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

菊溪乃門に入しは
正因翁遊のひし後なれハ

君は幾うぬ身に洗えゆかし　郭公　美好

粉妙しし成なん清座の白蓮華　霞梯

蓮乃香や　滔下四寸の　ゆかり新く　采駒

一むらし思ひむすや　おとく　お次　蘭風

十三四の法莚に洗なり事

捧たる新茶かな新や　像君家　花月

先師乃清白にすうりて

石菖のたむたる溪乃廣さう那し　仝

菊溪菴乃茂里栄なふを祝するハ
是故人への手向なるんすを思ふて

菓となり事花葉名にして白ひかり　貨洞

塚に名の御里てゆかし苔乃花　梅枝

おくろよく記らく蓮を手向う那　桃酔

極楽の便里　咲たり　おとくき次　祇角

とりあへ次風乃薫りを手向う那　可齋

正因翁遊苔の句を推ると朋友此来りて
殺句案する折事し子規の声しられハ

一夜を啼も手向れ　おとく　お次　江州丸山　巴秋

追悼

むらしとふ雲の牡丹を手浦くに　大津　鶴助

浦こなれも箒を染まる夏出う那　嵯峨　魯哉

手向ちや不二の攀乃神荔子　日　里隣

新すくし蓮乃香薫る佛乃座　宇治　古洞

勸持品　蟬も誦するや清の庭　浪花　朝可

姉るおもしろに花こちたるれ白ひ弐　南都　吸波

風かわる連十三鐘哉　手向数　日　楚林

追悼

西に日こりし寺志かれ連てや苔乃花　勢州山田原　弘臣

志ら蓮に世うえハ白紙なく召う那　日山田　寸大

さくらの実ちほまきて沽し庵の清さ　〃　巴玉

緑史や志らぬ山路若かんお鳥　〃　魯然

草むせ乃中に一筋清ふう那　〃　二世房

あつぎ日や京なつうしき水の色　〃　大一房

ゆらぬりていよくし風の薫りなる　〃　浙江

木洩れきあらはれしやあの月　勢州山田　禾石

岸やかへらぬ水のをしきあらく　〃　湖洞

静さやまさ葉さりの蓮のしき　〃　素平

蓮の葉やむより出ほす露の玉　〃　楚京

夏の夜や夏の半にしぬ志ら美　〃　徐州

正因翁在せし時好なひしるを思ひ出し
大麦を十三回忌に備へ奉り事

佛国を孫らしから来し麥の飯　江州中在寺　夷國

むらてる切事手向んとしけし　仝

菓溪菴乃主人先考の廣真忌をいとなら
まふの告を蒙りて俳友二三ヶ年を我誘ひ
追孝の席に連ぎ侍るも寄縁なりし免

瑜伽来家閼伽を結んで手向かり　歌中山　老法師　巴狀

輪をすてく十三回やくる波百合　音羽山下　巴大

俳友巴狀老乃すゝめにまかせて浅くなる
云の葉を灵前へ手向まりぬ

雅よりむ常ゑ吉を入るとも　鈴山

一夜の頃なりしかとしお次　沅波

思ひ来るふかや手向の蓮乃葉　波交

追悼

すゝしさや今もむかしに生る風　唇風

今日ハ雨に向ふて生ん百合乃む　潮路

極乐ハ唯やすゝし我夏こゝろも　東柳

侘数と清水むすんなら手向ゝ那　石城

蝉の夜見も手向乃ちゝ絡ゝ那　里松

黒紅日やこゝ絡たゝりの手向水　勇石

志ゝまぬ　たゞまちぬ此　小泉飛ゝ那　傘敲

追悼

師乃亡父正因居士既に十三帀の忌に当ま
ふとて左には僧侶を請して誦經し
右にはお勺を集めて助福し候なふ
何そ楊威姜詩ゝ孝に劣らんや遠く
等覺の妙意に及び五智圓滿乃梵聽に
達せん事疑ひなし弊衲も其厚苑志を感
佛名城唱へ捻香して拙き一句を捧るのゝ

をりひもや間岩　拙列真上　沙門　月桂

短夜乃　夏の詞

白蓮のちりしひまなし法乃水　摂州茨川　桂志

神咲を手向んとのよ蓮見哉　江州山田　松友

予田家に住けれハ

手向にとそのまゝうつふ田植哉　日野　川柳

手流れ汲んで手向ん苔清水　〃　文石

手向ともや昔かはらぬ蓮の露　〃　川遊

なふ跡を手向とすれや文月夜　京　賀若

西国寺十三回忌をいとなまるゝよし
弟子も其弟子一句をたむくるのみ

照りまさる法乃光りや又り晴　興角

紫の雲居よりのしめりく夕涼　貞之

其菊乃渓落すしも手向水　市僕

古ならしのよこそ西ゆけや土用干　社牛

余念なく向ふ持佛や又り西　加幸

やしくよ蔵る樒の新すゝし　鳳之

折の日出し給ふて坐るよすり雨　葺角

追悼

今に名の流れてすゝし渓乃菴　烏暁

古た人を思ひ出しなりたゝ幾寸　白鱗

追善

夏花つむ孝子乃ふみや夕附日　蚯角

先大人乃変へをゑひ津そ

忘れ艸乃むかし思ふやみなり雨　義童

手向なにすゝしき家の光り那　女淫

却とゝ御寸何なた人乃変もなる　都麥

追悼

津とゝ家手向乃独りし風薫る　伏水連　秀酔

夏来して手向や家も余流なりし　〃　蘆舟

雨よ日りし舞見車一巡里　〃　枝仙

思ひ出す此日ゆゑり蓮乃花　〃　棋有

そう紫しこ檸や横の使へもの　〃　蔵行

追悼

慈父の十三回忌をいとなゝのふ
孝子郎菴乃うしへ中とる

父忘し其夏のくれ夏此あるも　桜列伊丹　東瓦

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

時立川や卒故婆を嬰子切樒　江州カタヽ　歌雄

蔵て後も蔭乃ゑる事樗ゝ那　〃　蘭溪

まく香もとゝまゝ志めるや又りゝ　〃　籬邑

橘やむかしゆかしき香白ひ　大津　烏説

看經乃半まさゝぬおとゝ本次　〃　歌桂

枝毎ゝ面を含むや夏木立　源州　狐村

曇子とも志ゆるゝ事迄此樗ゝれ　〃　麥生

追悼

咲神ゝ蓮を手向のあゝろゝ那　浪花社中　佳山

思ひ出るまゝなきちゝ母や手向草　〃　芳水

西方から風の葉りや手忌日　〃　楚江

正因義ハ象師乃爲父にして世に在せしと記せる書月花にんを拾ひし先のひしに差形此林をたなれ源しよ蓮の產し安養淨土の樂しひを極先あふも光陰たや十三四若忌となれハ手向の數中も爲ひしと掛き云の葉を灵前へさゝけまるのゝ

夏菓乃今ゝしまゝ手相成　〃　素柳

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼　各家出略

橘のむかしを今かし薫る軒　浪花社中　琴三

萩そちやき十三年も夏乃夏　露光

千種の今も忌せて蓮若む　我笑

相當正因居士
思實忌依善業
後生華藏界

よれたる孫を捨して蓮の蓋ゝ那　江州水口　沙門　蓮車

手向んと思へハ蓮乃咲ゝ　〃　翅溪

花ゝ似ぬ其船の手向や栗此茶　来小人

都雀先生
亡父正因居士の十三回乃他若をいとなゝまふ
予も追福の一事佛前ゝ捧るのゝ

夏行から手向ゝ茶乃一枝ゝ那　江州八日市場　紫甲

佛前ゝ吊ふ風のかおりゝ那　日如来邑　洗耳

古塚の杢ゝ手向や蟬乃雑　〃　里紅

里紅風子の門ゝ拝ふ折から
沙ゝ傳へ家も手向んかさつまる　日平林　百歩

さゝ香の思ハ志ゝる又月ゝ那　日如来邑　何樂

追悼

鄙ゝ咲むかしの花を手向ゝり　播州高槻　枝英

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

たくおくの名もなつかしや夏の霜　奥州津軽　宣應

故人辞世の句をふまへて

おとしあ次ぬる幾　研を慕ひかり　日　貞松

一ちの白萩ゆかしし夏乃月　江戸　宗讃

蓮咲やすゝしき道の思ひなる　豫州松山　巴雲

喬り行や此月と日の意しる　播州中ノ城　南畝

塚に安くむかし偲りや郭公　備中連鴻　李口

蟬鳴やむかし桂屋木の桂　丹後田辺　木越

菓溪主義亡父乃君の遠忌を弔ひ奉ひ
と安く予も化卿に有て其志哉深く

なかしへてまた此頃や樹の実　加州金沢　馬佛

かくれなき名をむれ蓮ノ邦　〃　鈍鷺

遠し此日哉白きかゐ深たる　能州川田　佳超

追悼

清涼世や夏の雲小も夏乃月　清州罠　六犀菴

今も其袖ハかゝりしみす面　〃　冬古

手向るも雲井に遠しおとしよ次　〃　芦琴

四十五

擬 正因居士十三回忌之脾前

妙經や蓮もたちすの手向艸　城州打田沙門　路荊

日くに沈める功徳の夏茶の船　和州高山沙門　寄渓

業を經て うた南も無な蓮乃花　日所　東烏

故人問へハ耳にも跡しなきに　〃　春翁

手毎に咲を手向川蓮乃茶　〃　圓志

拙屋る牡丹そ永歳手向艸　〃　馬東

追悼

夕貝の招にあつらし歳手桶の船　能州　暮臘

悔む日に いさ喝ゆかしくに次　加州宮浦　竹之坊

郊菴乃ぬし茶うちれのをふきを
まつまるに風雅乃周ゝを結ひて
たゝるゝに手向に沈くなる

芍薬乃あれ白ひして古酒積かり　日金沢　兎文

追悼

一こ忌ハ麁へとくを　越後蒲原　里如

ぬるけ道とあらに増井の清水哉　丹州亀山　全瓦

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

正因義十三廻の忌に當日のかへて
葉溪乃先生追善の一集をいとなるに
ましまにコアもそ末席につらなりけるて

江州八ヽン社中

山中

さきそくまゐる蓮乃自ひや供養堂

蓮咲る知らぬ先師へ手向う那　〃　花心

庭の樹に蝉も鳴よむ法るに　〃　都水

くゆらすゐ薫りを深し持佛堂　〃　十六斎

コアも追善の一句をとるに
焼香なりて

極楽の風乃薫れるをもひう那　〃　飛支

正因義十三周の追福とて
葉溪菴乃主人法息を惠らるに
社中の一夜まゐ忌を城持るのに

奥州南部五戸

有以

めくりまる日と空て蓮のうてさ薫に

〃　鯉尺

塚乃名や告まる新へ風薫る

〃　五交

まほろしの閼伽や雲井の郭に

、

郡茂俊士にとし先考の曉回とて
あまたにうる越の志りへかしし追福乃
美やひをのほせようとあるに

越後高田

祖明

むの実にもとの嵐を空日う那

瑶京の郊者秀才先考追薦乃かな
手向よと投せらるゝ出書をよりせて

月百里 俳うつる文集し　越後高田　吾柳

閼伽に敢む清水を遠に耳すく　日　巴調

なれ人を思ふ夕アやおとくお次　參州吉田　時交

手傳ふていき閼伽汲ん入梅乃たれ　信州八幡　其碩

道芝や清水を仮乃手向ゆの　長崎行脚　永志房

手向ふとおとくき次嶋林ゝ那し　雲州植栗　遠沙

西新のきふきもちゝし蓮此月　行脚尼　俚尤

四十七

追悼

奥州南部三戸連

廻向して夏菓乃香の小ひかり　釈　素人

合掌乃手ふいと海なし　浴堂扇　釈　文兒

落く濃くすゝめつ画きハ新菓弐　漣月

空からに折て手向むかきつたる　旭山

作きゝるあらろたてなし夏乃月　五郷

俳乃在うとし　白蓮華　観之

花萎て雑史枝乃蔵りゝ那し　亀隍

四十八

鐘の音よりれも手向や喝水鶏　柏水　奥州南部三戸連

是を可なる歌をなへ物なれ雲此峯　三履

笹に水ましの手向う那　一溪

春伝に歌も手向ん白牡丹　如水

日く新むのむかりや百日石　画柳

手向るも道乃流れをかさ渡る　去良

手向んと汲に流れ此月すゝし　其白

菓溪乃流れ清くして志のも功名年ゆり
交に爲亡父の祀哉いとなるふ法その
夏乃邪ふも入ならハ生涯の大音こく　豫州宇和嶋

むすふ手にさくろ有ゝ清水哉　暉里

月志行や雲伴を龍かさ渡　播州天神町　鏡花

蝉の音や苔に志ゝ也塚乃上　竹人

吊ふ毎に蔵りを見せ川夜木立　和州長柄　柳歌

なつかしき香や橘の一むかし　丹州梅迫　暁里

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

鶉多此木魚乃外に水鶏ゟ那　流水

手向ともなれ筆乃視まほり　深艸　一耀

蓮の葉に念佛をもらん香の向　〃　沙門　子静

いつとなく光くる月日や風車　丹後北有路　始皓

手向ふと一篭染ぬかさのしたこ　〃　芝月

其者ひと見る万燒ハ不ゝるゝ那　〃　路逸

るし世や又めくり来て蝶乃種　〃　鷺雪

却雀翁乃先考十三廻忌に當り
まふとて人々追悔の句をもせられし

橘の香もまゝ元に吊ふ跡床　江州小谷　耳毛翁　半化

春秋八十歳　末弱出

右半化乃翁ハ淡海乃詞宗たる事知らぬ
人なし　ちむりし花洛寸松堂より
軒号をゆるさ海く時　林石翁
寸松より言ふ一松軒を
門人半化乃ぬしへとるに

一花松世へ立延よ　ゟ見とり

五十

と一句に祝せられしは四十余年まへのるすにて
手後寸松堂の号も此の徳なりしと云ふ七父正因公羽も
林石公羽とは俳友なれば半化公羽の古記書一互の書
をかきおきれしもまた十二年ほどまへしるすしを記
半化公羽と予両選の事なといへて来て書信も添く
まして今の寸松堂芦牛のぬしとは因ミ切まて
年々業北戸を敲るゝ者乃かたらはに試むつら月
半の頃へ来りまへハ風俗の終りに七父追善し事
老師へ傳へ給ハれど粉書ハせしに公羽旧者より
きゝならぬ心地にて成るにしなりしにはも
俳道無りなりしに幾ばらく記の頃黄泉乃
旅へ趣なふ手形筆をとり七父ゟ追善の句を語
垂れよしまし芦牛乃ぬしよりハ送りなる
文に誠に老師今ハの際乃筆の語なれハ

なとゝ字へられハ蔵渡に末よもむるも千歳に
してかく末詩に一句を称し手向られしは流石
名ぞなる老師其こゝろ語乃有かた記を感歎此余り
渡なりし津こなる記言の意ふ我友に画し是 原きて
志をいさゝか敷せんかきもんと

むかしゝ釈迦如来ハ衆生済度の為に
一切經を説給し終に陽案八十にして
入滅しまふとかや
今のゝ耳毛乃蔵ハ数多の門人此為に
縦横無尽乃俳道を説ゆゝを終に齢ひ
八十にして

おもしろし涅槃し

似ま新佛哉

都雀
三拜

正因翁十三回忌追悼
[illegible]
[illegible]

江州 日野連
修六

[illegible]
斧人

[illegible]
咏笛

[illegible]
桃宇

[illegible]
貞績

[illegible]
蘆牛

菓溪菴先大人若十三廻忌に
[illegible]

近江
鷺石

[illegible]
[illegible]

追悼

城州 ヤハタ 沙門
蛙方

[illegible]
鯉文

[illegible]
古律

[illegible]
膳所
不習

[illegible]
柳枝

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

年月を後浄くせしか又月夜　江州高田　去何

珂や色葉新ハ家々紅袂　日長濱　梓沢

手ぬしの居ずはかしし蓮の花　日速水　志鈴

在し時うへし梅乃ふのり成　〃　以流

手向とも成やうに菓ま孫ぬ　丹州十倉　遊可

其以来くりゝぬ法や白蓮美　〃　雀志

手向ま紀と帰も山家のおくさ庭　日すへ　花景

郊雀詞宗乃爲父正因公羽世を辞し
なひてより十三年実や日月の流るゝ
事水よりも疾くいとなるの日も祝なく
五月乃ふくふまゝぬ予も又千門を叩く
乃人々ぞ救ハ無ら祢と　洛西桂社中

蕊の雲や塚しも花菖蒲　〃　麗東

十三里永の手向やまゝ珂ひし　〃　香堂

黒き日も九界ハ唖な風薫ぬ　〃　加桂

今ハ唖十三佛と名とり艸　〃　二休

蓮の香乃四方ま薫する浄法成　〃　琴松

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

松小百合もうつむなて居る御經哉　桂社中　青耕
手澤いまゝ残るも床し　去用干　〃　塞馬

追福

増を見果位乃蓋や夕すゝ美　城州桂の浦沙門　鈎月
月と日よまして蓮すや瑠璃乃増　〃　月歌

菓溪菴乃うしかる父十三回の
おもふる牌前にてなふ

よれ衣よ名のゝ残りて夏此月　日　大久保　衣翩

都雀先生乃孝心を忍びやりて
降るハ血乃涙れ母のおとゝお次　日　撰木原　冨存

老ゝ眼ゝ石菖の蓋かたへかりと
正因翁乃古れ句を思ひもして

石菖や手向る水にし常元々録　膳所社中　其葉
風涼し姉しつなむかる道乃葉　〃　雙々
碓へ渡く誓ひ乃雨やかれつたる　〃　三巴
すゝしさや更行月も雨の夜　〃　女　冬雨
月さゝし光も清ぶよ秀新端　〃　少年　柳指
涼し清や蔵まる中に水れ吉　〃　其爭

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼　前去略

涼風ハ弥陀乃沸玉の便りこのも　膳所社中　露玉

正因翁辞世の句ハ思ひ出しく

手ゝ折来月にとゝくやおとゝあ次　仝

追福

薫る風も花と吹匿し蓮の池　〃　亭山

法恵といくとは一句を手向るに
手恵なる様称ます

用しなその紅もつうしや鮑牛　仝

追悼

祢に巡る調へやまたし松の琴　三井寺　鬼童

追悼

柱子の家も手向となりにけり　膳所社中　女　其梅

るしおとの袖にこほまつ蓮乃家　〃　十歳女　達

思ひ出も被し結ぶ清水ヶ邨　〃　蓬蒿

一夜も手向に濁れおとゝあ次　〃　危當

みす毎に如るく彼や墓のまへ　〃　挙石

懸楽ハ無な木蔭に風かほる　洛　柳子

けらし井を汲や忌日乃手向水　〃　里水

五十五

追悼

虫干や記そうに多れ人出入　洛　和水

なれ魂を昂ふ無るや　〃　清玉

ふこ先てそふを手向や神荔子　〃　可候

閼伽汲んで墓へ手向に美人艸　〃　樂栄

悔り得た身にハ涼しき手向ぶ　〃　魯若

う浦り香の出るを惜ふ去用干　〃　樂水

幼少し時御歳へを更しるなと思ひもして

すゝし所ハ苦我今にかゝる風　伏水　哥柳

菓溪菴主の七ヶ父十三廻の忌に当れハ

十とせ余里樒を苦かく月すゝし　江州カタヽ蒲萄房　沙門　未角

我ハ身との我にして塚の苔の花　沙門　千羅

出り来て手ゝ又手毎やおもハ新く　日所　静江

蔵し手紙の蔵里や夏木立　〃　其道

おと問へハ松に竜所り雲の峰　〃　素程

立ぶ遠く結ふ清ふ那　〃　二笑

灵前に月を涼し来手向ぶ　〃　里雀

都雀師乃慈父の十三廻忌の
俳筵に奉る

こゝ此虫に行こて又月の父忘し　江州日野　桃雨

十三年や扇のお祢ハくりたゝ次　湖東鳩涯堂連　西本郷　一湖

和くら葉に露此手向や蓮の花　木原沙門　道二

法数を手向る庭に月すゝし　〃　大礒

橘にむしを思ふ彰端う那　上田　菊芳

揭蒼の佛法を与執安居うれ　〃　畝麥

るし世の蘇なつかし風薫る　如睡

迄一帰　各お出略

手向ちや有合ふも故夏雨日　江州三川　杰風

有かたり手向に午時乃蟬の吟　日　奥樂

思ふ日をかそへ手向ん雨合此花　日　英寺　歌桂

蓮の花咲や手向ち十三年（ヒトマハリ）　日　鳥尾平　故尋

志らぬ事ひ乃こゝや去用干　日　古ホシ　露伯

袖にし知る十三年や五月夜　日　ミツヤ　龍水

蛍火や意を思すも君なれ　日　品中　霞川

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

かの星にすゝしさおるや十三夜（ヒトマハリ）　丹州日ヨキ　沙門　亀嶽

多瓶の蓮を手向ゝ手向艸　日所　井鮒

追悼

西に産寺蓮の麁や風薫る　江州宮田連　故友

菩提水こゝろ斗乃手向ゝ那　〃　先之

白蓮の上にやすゝし月の新　〃　牛子

法も今や絶へ次木末に蟬の殘　〃　二角

知らぬ身もそこの支（アト）来て夏出ず　〃　柳枝

知　者　しゝ慈父の手向に一事をとる

十余り屋若蔵まや手向艸　上州高ヶ　雨計

追悼

晴て粉粉る樗乃雫ゝ那　江州高岡　露誠

手向にとよむにや處の蟬の殘　日千傍供　百之

篭絵の粉りてゆうし去用干　〃　一笑

菓溪菴主人乃為考十とせ余り
三とせ毎に蒙る祥忌俗言乃おとを
守て一句を呈し給る

家もその流れ手向ん菩提所　日高岡　枝鳳

追善

蓮咲や手向の水の記とまゐり　湖南大津　里雪

今は故人の在りとしなれハ

夏菓やゆかしき茶の香も絶ぬ　仝

本当うけて手向よ塚のおとしお次　日　菱の尾　女　涼風

清水をは汲んで手向ん塚のまへ　江州ホカ　沙門　南林堂

南無佛の菊は別染菊紫う那　日　加茂　景山

涼風は花降る事味や持佛堂　〃　甲美

手向ともや名もかなし哉雲見艸　和州ら山　巨石

追悼

涼しけも咲な蓮若深ふさ紀　紀州廣連　沙門　考峨

すゝしからん室の池の手拭ひ　〃　几仙

うつむぬて若ぬりふ乳堂の百合　〃　女　其蝶

本ゝの菊ふも菊て涼しき手向哉　〃　女　紫葉

洛東なる菓溪菴の主人郎雀雅兄
志とし此度亡父君の十三回忌を弔ひ
まふよし女の使ひ空へなから行程
せ隔りられハ寸志の手向も五七五の
云の葉をつりて手扇前に置する
このなりし　日所

居なからの手向もとらせ風の香に　木睡

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

郡雀主人乃もとへやまる
思ひ出む芸橘乃香にし今も　右同所　露尹
手向
早苔の花咲塚や　むとむかし　仝

追悼

芸此雲を手向やはな樗　江州瓜生津　相應菴

藥溪乃師より追善しまふ
ゆゑ法有し歌のうらく葉を
かくやせしと目ぢ先し後傍
なるものく語りなるまでをかの身て
昊前へ捧る事ともなりぬ

追善のはなしに鐘ハ鳴るなり　同妻　登竜

慈父の十三廻忌を弔ひまふ
ここに主人はおくまして

人乃親を思ふに異し歌なれど　豫州松山　一佛菴　支狂

行水にまゐて蓮花かなりう那　一佛菴社中　此君

音樂や蝦も聖流乃薄衣　〃　左川

うつむくも手向の数や百合此花　〃　些美

思ふ今ぢく拙子乃手向う那　〃　里卿

芸の雲一ましやかさ津れる　〃　之彭

歌もすがら新菓にや急佛式　〃　里邑

捻香やうつも橘の一むかし　〃　蟢笑

洛東菓溪菴主人乃亡父正因居士の
追善をなしなのひくるまし宮のへくれハ
とゝけりし此夕立若塚へまゐし　豫州松山　柳果

塚になけ今宵故のおとゝぎ次　日　五丈

遠城にうれハ
其百里風の薫りも手向ゝ那　信州月岡　兎柳

豆臭れ茶を手向乃こゝろゝ那　日　里風

正因翁乃十三廻忌に辞世の御句を
思ひ出して追善をいとなまるゝ
孝子都雀宇志乃もとへ申ゝ送ば
手人の侍ゆゑのしおとゝぎ次　日所　可考

十三廻苔にかゝらん
凡生の門人並繁栄なるを
正因乃翁も唯悦ひなんやと
蓮華ゝ花も知ふ拾人新菓茶香　筑前福岡　花友

正因翁存在の苔を横ゝて
主のたゝぬ菓や五月の夏乃庵　日　和遊

菓溪乃詞宗を訪ひしを
十とせ余りありし事遠くも
山海を隔てぬれ文の便りこし
んにまゝのせ御ましにおくらむ
正因翁の十三廻乃追福を実行りて
思ひ出す佛や風乃薫る度　紀後熊本　芦隠

ぬれ色乃樒手向る皐月哉　日　六川

六十

都雀宗道乃亡父師にとし
忌に出りのふ志を営ありて
其集に加らんるを思ふて

光陰や十と三日なる月涼し　能光七尾　蓋埜

笑亡父乃遠くるまし詩を
いとなく孝道のうさかを示しかふ
都雀詞宗乃誠心是に志く無くんや

実樹や蛍の光なる夜もすから　日　鯉湖

又かとへ帰るこゝろ此又月の那　肥前大村　表水

先生乃俳是を蒙りし才永志房ハ
未行御中なれハいつくにもあれ
手向んるをさつして

まちらかうの心たのりやすかさし　日　志卜

高坪正因翁ハ其先勢州の神職乃家を出て
禅室の窓に心の月を洗さしめすひし
身なれハ情学清戈にして誰か敬せさらん
といふるなし忌老も三十年以前此国を
思ひ出しく一句を爲ん捨て御追善の志を述る

よし人ハ嘲を今に風涼し　大圭館　魯口

るし詩ハ東武へあ田ら去秋乃詩画ハ
足にまつりせて滄陽追趣彼是俳諧作に
出合しに都雀詞宗乃嘗のこゝ誠にし
遠ざ深山たて知れぬ海辺なしも知る人
多うりまゝ予亡少せ余りの俳友なるまハ
秀なひしるの悦ハしくさらひ志りへに
清さな紀一句を添て先生乃繁栄を
祝するも故人の追福ならんすを思ふて

何国にしも蓮乳却乃風の吉　仝

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

宗匠乃彼へまかりしおりうち
先考正因翁の十三回此追善を勤むる
俄莚の旅しられハ我何人次

咲清く涼見乃芸の勢ひう那　按列言槻　其風

彼国へ涼風　送迎法のうしろ　江州丸山　沙門　辰嶺

海畔堂鶴仙房とハ予ゝ曾祖父之
代ハ十七回を弔ふとて内佛の掃除等して
芸なとし新しくかへんと思ふおりし
菓溪主人等父乃十三回の空へ給れハ

そて涼る蓮を手向乃さく給う那　日　品中　烏月

先大人辞世の清白を思ひおしく
ゆうしさの夢を空日やなとくお次　〃　里扇

新井戸の水を手向乃忌日うう那　日　舟木　清流

元考正因翁十三回の追悼に

有徳やさまたる人ハ善知識
河のく芸挑の種をこさしく　洛東　沙門　顕曜

先生に為れしるハ一むりし
今に象身ハ西海にうしく　仝

追悼

玉貌の花盞に拾て手向をうきもなんと
ちふ事そ予も飲浄乃心濃かうしける余り

蓮咲や八功徳池ハ法そやく　江州下笠　沙門　諷葉

すゝしけや手向乃水に浮りな事　〃　一葉

光き徳の日くに栄元津夏木立　〃　哥枕

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追善

[illegible]の招に笑ひうえそり責忡　江州下笠　友子

手向ちやくふもかいくぬ　西日和　沙門　里雀

慈父正因翁乃十三回の忌を弔ひまふ
却雀詞宗乃孝心天に義通してや
俺門日とに繁昌しまへハ作善供養
[illegible]中にありと知て　日所

桂傳ふ牡丹　招津よく栄えく季　沙門　露蝶

追悼

又月夜に[illegible]人をもふ反[illegible]　江州今津　魯口

正因翁の身まかりまふもちや
十三周の忌しと定て
[illegible]一章をなる

[illegible]蓮やかえ乃形の　手向忡　信州上諏訪　白徳

先大人乃辞世の句を思ふ事

[illegible]まつ[illegible]ちや一むし[illegible]月　信州飯田　蘭二

正因居士十三回の忌に当りまへハ
遠鄙乃名恩を
却雀詞宗乃[illegible]とて

手向添ん[illegible]　香玉[illegible]　日所　花彳

正因翁辞世牡鶴の句を思ひ出して

声乃[illegible]　越後十日町　八十一翁　山之

追悼

花摘るなれ君思ふたち日ゝ那　奥州南部一戸　彩雅

俤乃ぬまにうとし雲の峰　〃　霞流

しんしと風薫る人塚乃苔　〃　霞松

正因菊翁乃十三回忌に忌此を
なるも遠境なれハ心事を申さる

風薫る度をこゝ話の手向ふ　奥州塩竈　佳堂

正因居士十三回の追福に那達を使へるも
遠境にゆつて山海たるゝ小陽にれハ

涼風乃香の薫りや三百里　出羽州能代　七十五齢　沙門　来翁

人ハいつしとる去し
正因菊の手忌とて孝子菓溪庵乃ぬし
人しに懐旧の句を乞ハれるに

菱蓮乃香をとゝ先ゝり水の月　膳所　沙門　蚊山

おとゝき次志のふ十万億土ゝ那　大津　騏道

蓮の葉の巻ても余る匂ひゝ那　城州ヤハタ　李風

正因菊乃追善の日に接んと

さし出すもとなつかし白牡丹　洛　宗鳳

十三回乃追福ある
千君や風流にと英のふ
英名に今感歎し侍りて

道芝に残る恵ミの秀すゝし　日　閑雅堂

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

追悼

香をいとむるむらちとなれむしかな　洛　茶狂

蓮白し十三年此かほりかな　〃　棹雪

実にも因かれハ果かり菓溪庵乃初宗にし
尚夏より別まいらせまに若年の芳紙繰りしに
幼きちゑ知るにて今十三回の先考もしたしく
往て通ひし中なるを指して美ふれハ庭生ゟ
一瞬にもちらくたしめて夏荒に飛して去の
庭ゟにたやく別瞼ひぬるもしたりなるゝれと
うなゆゑく手ゆりにしことを思ふ乃余りいさゝ
夜よかゐ生て又もや麁句を灵前へ持るのゝ

歌中山清雨寺老法師

なてしこに家もをとらし四十年　巴狀　三拜

追悼

旅人と呼るゝ夜よりまれまゝ夜　甲州夜田　作良

先大人乃辞世の佳句を今に感して

西行乃俤思ふなとく夜次　日慶ケ丘　臺珉

夜の上や庭頭百年夏乃月　日馬沢　羅文

又ゝ夜や又めつらしよ月の暈　日市川　唐笑

涼風にしゝ来たるれ行栗津ゟ　〃　岷山

夕山や百合折さしく郭公　日夜田　黒澤坊

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

甲陽乃徳君より手向の玉吟を投せられしまゝ
可都里子の句乃なれば金剛まゝ又乃滞留也へ
と云へられハ法こんて詩よりも手向のけるゝハこかふ
ましき事猶ともしやをかゝまゐるおとも有なんと
思ふから彼地よりもおこひ恵まれしさりあの句を
写し其前へ推し後方へおせしは名師乃堂の
かれんるを惜しての也へ之はよしかしこくもさらしなりぬ
しと法こなれ一句雄そへるおとゝなりぬ

千まくにさくは流さし郭公　郡花

、

夏蝉乃庚へ有られハ却とく歩す　甲州　可都里

郡花子乃慈父の十三用に予も結縁に
記れて一句を手向侍りとて

桂賞ふを講しまゐる小夜そも　江戸三浦坂下　宣麥

朝風や若葉乃家の一志花里　日曹司ヶ谷　聞花

鶴夜や毎ちま地更高　法乃春　日小石川　不門

簾の夜や静にうゝむ水の上　日大宮駅　杉路

なれ人を志葛ヶ原のおとゝお次　武州常久邑　涼花

夕くれや唱名のなく夏乃門　信州善光寺　援左

夏川や清き流れを手向水　日　柳莊

六十二

追悼

[illegible]　豊後日田　其爭

道芝や更にし宿貸す[illegible]　〃　靜齋

山[illegible]や[illegible]　〃　亀洞

[illegible]　奥州南部　文明

[illegible]　飛州萩原　蘭路

一[illegible]　〃　羅仁

郭[illegible]　越後十日町　宿思

正因翁十三回忌追善五月十九日於
洛東雙林寺閑阿弥亭興行

百韻

老ゝ眼に石菖乃[illegible]かそへ[illegible]　故人　正因翁

[illegible]　都雀

山住乃三日の糧をうけ[illegible]　月峯

追[illegible]解る沖巡玉人　李三

[illegible]　古塘

仮神事に鴨乃[illegible]　烏曉

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

后の月感すなかりよ　漣月
合歩し菓を出し卓下　月桂
来る筈の甥乃書生ハそのこなきを　湖人
鈎精をも上る世乃おし　東皋
外交から内交までの旅ふろも　巴狀
化粧もいらぬ十九や六年　霞梯
もつまに局しをぬきなし　雫滴
杏も菓ふりろも出し掛り　波音

冥山若侍へし茉弘まり事　玉淵
琨琶乃磐古の月に取すから　何得
宮ノ治ちり紀木幡の星乃秋をこ　篤主
外穂荷へハ笠ゝかゝ掛く　義童
友達ゝ男し志ゝる赤くしら　正保堂
清書強ゝ宮し當　玉枝
溪乃花炊しく烟りに立文を　富嶺
分りかゝ寄る　春乃蔓艸　東鹿

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

出者江布目若屋　塚南亭　桃李
又借りに来る年代紀ゝる　松石
此藪にし嶋の龜乃出もせられ　李冠
嫁入らせたこハ後广を毎日　賀若
生弱山鏡を立し表向ふにし　季陽
旅籠貸屋　庵乃斤紛　軽羽
別るゝに曾良ゝんを思ひやり　紫甲
去のむしくりハ余酒の白毎　芝川

干物の荷乃何和やらにし破嗅れ　古竹
神楽太鼓のけしもいさましし　馬東
鯱やうに達しハ池の端ならて　圓志
本田乃醤の今にすゝられ　義好
月花往来鵜咎免もなうまゝり　呉明
秋にしよくるゝ行ひせ帷子　女夷
稀人乃庭の蒸を業毎にし　素柳
隣といふも谷を隔ぬる　路川

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

雪橋
都麥
巴陵
鳳之
飛支
芦牛
志諺
山中

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

さらくと女やもめ乃 蓋所　冨存
いつ習ふてか 綾をれもよくと　傘敲

右一巡
未畧

於菊溪菴
正因翁追善之一會

古人
正因翁

華乃化粧うるハし花の蓋
然る蓋へ乃 今より身に入　都雀
忘ちかく 攤る書に月けしく　呉明
笠を 重ふ余不乃 山水　仝
一姉し 我連なる競北宰はらに　志諺
おくちも志めるる面の所しさを　李三

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105
ガラス使用

牛乃子も家田と知り事先し立　明

達の幾しく落ちうる梯　仝

嫁入者鳴とりし縁の端　諺

流鶯の光る者そかも　雀

梅檀此花の蔭なる流し沈し　明

繋ける馬乃毛矢うつ多し　諺

をもそ朝ハ氏に一度の青侍役　雀

形見の兜　妙棲か作　明

月深る伽藍乃うちの如凄く　諺

眼口光らぬ白桂乃虎　雀

越事来て峯を見えくる花戻り　三

川乃中小も鳥乃鳴る　諺

家長かむし語りを耕し小　雀

笑するかけて傍尓讀居る　三

思ひ居も扉明まは雪乃朝　明

山しし里へ兒のことなく　雀

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

廣蓋の中まで余まるから錦　諺
伊かまれ　隙拾乃琴　三
悪ひ路の冥鳥今ハこと程りて　雀
小祠にてたる長貢一斗　明
とうしくと洗ふ澁乃いさ紀よく　諺
生業噛る旅乃樂書　雀
僧正も月を眺の欄にし　仝
新酒なつくも碧蕉る碎　諺

七十三

青の中網引乃夢此高くと　明
焼籠乃旅主ハ　京乃恵比須屋　雀
おとくお須ゆかしと紀をしたれて　三
讀さ此事あ新庵も倭も　雀
留守の日無花を主乃庵なれや　明
皆たのりしきまちの法莚　諺

右

師乃先考の十三回忌に当りくれハ
其を近の諸風子各近善哉其句を徳のふ事
千ち活させる事の所りて漸此文月忌なる
お句して奥おへ

手向ちや 蓮ハなくとも 蓮ス乃実

李冠

予 七戈乃とし此 志の前へ準とり亡父たしめて
手をれいろは我家へ始めたまふより今まゝ紙筆を
ふ習サ一戈乃まもより別家へうけり人乃すゝめ
よりて幼事へ手紙の指南をたしめるに十一月廿六日ハ
誕生乃日なれハ両親招待すへおの処若干の意りにて
ちるすなけ置しを亡父より呵しも紙を書せし
うはち整ひより招待して大切に祝儀を勤しに父
世を去のひし後ハ大しく手紙を一性となし例年
誕生日小ハ其前へ彼墨蹟をうけて在ることく今に
到ふくに家族諸とも祝ひしも教への得る有かたき
と仰しも事を志れ写して家へおせしに其ある恩
を思ふ故へ

都花誌

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105

ガラス使用

文子於螢窓雪案下努力讀
賢聖書典季久然而無學業之功
徒不作著述仍以五言四句一字三韻
責厥愚曽云爾

汝久讀文章
實知曹植章
速吟新好句
吾贈二三章

清藏
稿

除夜

今歳ノ光陰将ニ盡キント夜
孤リ依テ燈影ニ待ツ明晨ヲ
深ク憐シテ文子カ學書ノ業ヲ
不レ覺我儂カ白髪ノ新ナルヲ

清藏

文子ハ郁雄
若年ニ名之

明和二酉年

父教へ師嚴(イツクシ)く友(フタツ)好うて外なれども
学問成る事なれば子乃罷んと
言ふこしのかしこれ人ありしひ
もすれし郡身乃事れ亡父や
生涯勤學我好んで他事なれば
父乃道を以事教へる時ありしく
師に成く等(ミナヒク)とれば恵ニ深りしこと

国立国会図書館　タイトル『法の水』　請求記号 863-105
ガラス使用

今年もしと成て其餘光かき
まてくもうまくらさ葉溪乃窓
のまへに親恩乃志ていしぐ事

常火や宮にし

都光

淡まれ千ち光

亡母ゟ追福に清水寺の墓所へまふて
六字の名号を頂に置て亡父ゟ手向し
和尚ゟ御り才二首にし

無事壽の御名をとなへて手向ふと
汲ゟ青羽若 淡乃下水

とよまれしるこしかたを思ひもし
父ゟ墓所へ手向ぬとて

又りし夜北たえぬ青羽の淡淡淡に
くりかへしつゝ若をそ思ふ

都崔

法方よりの恵を悦ひて

義り来や子来にあまれ手向ぬ

正因菴隙終の日ハ毎いくふ降れハ
一周忌ハ
去年のくふと渡ハ降りぬ又月雪
と思ひを通しもたゝや十三年のくふハ
歯れハ灵前ハ香を新称りて
思ひ出すおとゝや又ハ此雨のくれ
いまし子とし皐月の其日を
かすしさの子渡を流せしハ
おとし正歯の法筵ハ
読ゆかりの所あるゆ玉章をよそ上るハ
各源ハ志の身ハ何なりて
焼しさの渡こほ来川 此月日

大休庵直入正因居士　十三回忌追福
五月十九日

菊溪菴都雀
九拜

菊溪菴の如し追吾郎一条堂を余ハ
没取をもハ是ハ此ハ古家所乃拓是
栗田子恵庫の文石夫婦ハ如此法ハ拓ハ
多ハ其家ハ多ハ如ハ足我ハ加ハ東
是まで庵主の玉章如ハ是ハ雅の是ハ
志乃渡ハ其家ハ此ハ如ハ多ハ此ハ

寛政壬子夏

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105

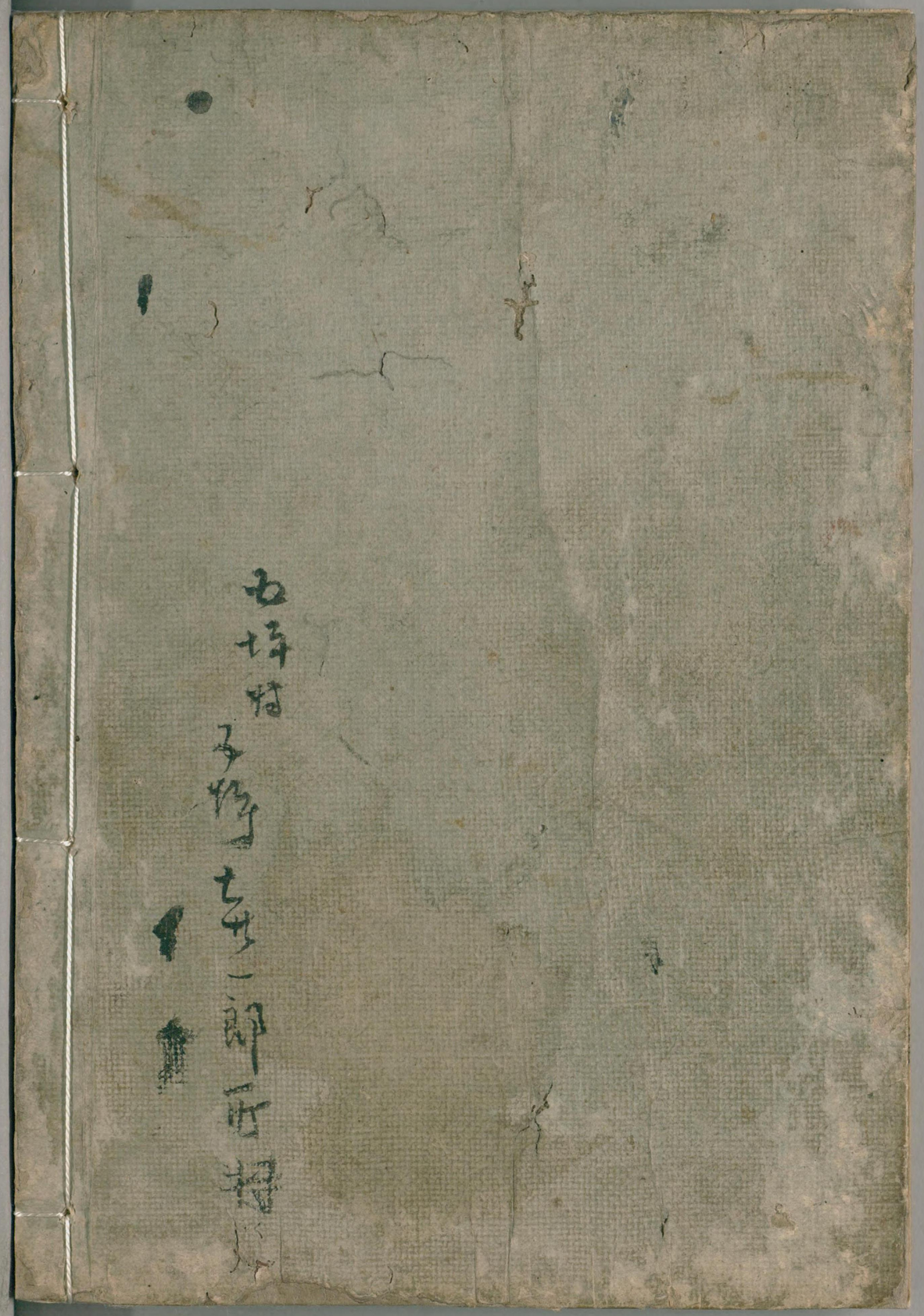
ガラス使用

863
105

14146

国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『法の水』 請求記号 863-105

ガラス使用